

高校生は学びたがっている

——普通科高校生調査から——

田 中 節 雄*

High school students are eager to learn
—From Survey of High school students—

Setsuo TANAKA

1. 問題意識

2007年12月に公表されたOECDの国際学習到達度調査（PISA・2006年実施）の報告書は日本の高校生の「科学を学ぶ動機付けの低さ」を指摘している¹⁾。また、高校生の「学習意欲の高さ」は以前よりしばしば「学習時間の長さ」を指標として測定され、明らかになった学習時間の短さから高校生の学習意欲の低さが問題とされてきた²⁾。

ところで「学習意欲」の問題については、私たちはしばしば次のような単純な図式で考える傾向にある。すなわち、「高校生の学習時間が短い＝高校生の学習意欲が低い→授業時間を長くしたり宿題を増やしたりして勉強時間を長くしよう」という図式である。しかし、はたして「授業時間を長くしたり宿題を増やしたり」する方法で「高校生の学習意欲の低さ」に対処しようとするのは高校生の現実に適合しているのだろうか。PISAの結果が示すところでは、日本の高校生は「科学の勉強が自分の将来に役立つ」という実感を持っておらず、また「科学の世界に進みたい」と思っている高校生はOECD諸国のなかで際立って少ない³⁾。理科や数学に関するこのような学習観と、それがもたらす「学習意欲の低さ」は、「授業時間を長くしたり宿題を増やしたりする」ことで高められるようなものではないだろう。同じことは、当然、他の教科に関しても言えることである。

我々は、「授業時間を長くしたり宿題を増やしたりする」といった措置を講じる前に、「学習意欲の低さ」として捉えられている高校生の学びの実情を今一步踏み込んで把握する必要があるのではないか。

例えば、高校は「高校生が学ぶに値する学習内容を提供している」はずであるが、当の高校生自身ははたして現在の高校教育をどのように受け止めているのだろうか。とりわけ授業を中心とした「学習」という活動を彼らはどのように意味づけているのだろうか。また、それらの活動に対して彼らはどのような構えで臨んでいるのだろうか。さらに「学習意欲が低い」と一般的に言われているが、高校生はどんな学びについても学習意欲が低い

* 人間関係学部・人間関係学科

のか。学びの内容によってその意欲が異なることはないのか。このような問いは学習意欲に関わる重要な問題であるが、これらの問いに関しては十分な検討がなされて来たとは思えない。

以上のような問題意識に立って、私は高校生を対象に「学習を巡るさまざまな意識」を明らかにするためのアンケート調査を実施した⁴⁾。本稿はその調査結果を基に高校生の学習意欲について若干の考察を加えたものである。

2. 調査の概要

上記のような問題意識から、本研究では A 県の普通科高校 5 校の生徒を対象にアンケート調査を実施した。調査地の A 県には約 240 校の高校があり、そのうち半数が普通科単独校である。それらの高校を入学難易度を基準に 5 グループに分け、それぞれのグループから 1 校ずつを選んで調査対象校とした。ここでは 5 校を入学難易度に従って「難関校」「準難関校」「平均校」「準平易校」「平易校」と呼ぶことにする。なお、A 県の大手予備校による 5 校の調査実施年度の「入学偏差値」はそれぞれ「60.0」「55.0」「52.0」「46.0」「37.0」である。

調査の概要は次の通りである。

〔調査時期〕 2001 年 7 月 10 日～20 日

〔調査方法〕 調査票を、教員を通してクラス単位で配布。自宅へ持ち帰り、記入後、学校で回収。

〔回答者数〕 1039 名（男子 553 名 女子 486 名）

表 1 調査対象者の学年別性別構成

	1 年	2 年	3 年	合計
男子	215	158	180	553
女子	201	157	128	486

3. 調査結果の分析

(1) まず、高校生は高校生活全体を、またその中での学習生活全体をどのように受け止めているのだろうか。それを明らかにするために「学校生活全体を、あるいは授業その他の活動を楽しみと感じているか否か」を尋ねてみた。

①表 2 からわかるように、学校生活全体としては「楽しい」（とても＋まあまあ）と感じている者が 78.5% と圧倒的に多い。

確かに、入学難易度によって「楽しい」と感じるものの割合に差はある。が、ここではその差異を問題にするよりも、どのような入学難易度の高校であれ、「楽しい」と感じるものが大多数を占めているという点に注目したい。

表2 学校生活は全体として楽しいか (%) N=1039

	とても楽しい	まあまあ楽しい	あまり楽しくない	楽しくない	計
全体	18.8	59.7	17.0	4.5	100 (1039)
難関校	51.4	41.4	4.3	2.9	100 (70)
準難関校	27.3	58.2	10.9	3.6	100 (110)
平均校	25.0	61.8	10.9	2.3	100 (220)
準平易校	13.1	66.9	17.3	2.7	100 (330)
平易校	10.1	55.2	26.0	8.8	100 (309)

表3 授業は楽しいか

	とても楽しい	まあまあ楽しい	あまり楽しくない	楽しくない
全体	1.7	31.3	39.4	27.6
難関校	2.9	45.7	40.0	11.4
準難関校	1.8	32.7	40.9	24.5
平均校	0.5	26.8	45.5	27.3
準平易校	1.5	27.0	41.5	30.0
平易校	2.6	35.4	32.1	29.9

②では、このように大多数の高校生に学校生活を楽しいと感じさせているものは何なのだろうか。学校生活のどのような具体的な活動によって、高校生は学校生活を楽しいと感じているのだろうか。学校生活の具体的な活動別に「楽しい」と答えた者をみてみよう。

まず、学校生活の中心的な活動と言える「授業」について見てみる。高校生が学校生活を楽しんでいるのは授業のためなのだろうか。

表3を見ると、「授業」が楽しい（「とても」＋「まあまあ」）と答えたものは33.0%しかない。しかも、このうちのほとんどは「まあまあ楽しい」のであって、「授業がとても楽しい」と思っているものは、わずかに数%である。

この割合は入学難易度の差と関係がない。その点に注目すべきである。「学校生活の全体としての楽しさ」について、難関校の生徒は「とても楽しい」と答えた割合が他校と比較して非常に高かった。そこからつい「学力の高い難関校の生徒は授業を楽しみ感じ、学力の低い平易校の生徒は逆に授業が苦痛なのではないか」と推測したくなるが、その推測が誤りであることをこの結果は示している。

次に授業以外の活動について見てみよう。

表4から分かるように、その活動が「楽しい」（「とても」＋「まあまあ」）と答えた者の割合は「友達との付き合い」については91.8%、「クラブ活動・部活動」については68.5%、「休日の生活」については89.0%となっている。「授業」とちがって、「友達付き合い」や「クラブ・部活動」は大多数の高校生にとって高校生活のなかでの楽しい活動となることが分かる。

表4 「友達との付き合い」「クラブ・部活動」「休日の生活」は楽しいか

	とても楽しい	まあまあ楽しい	あまり楽しくない	楽しくない
友達との付き合い	42.3	49.5	6.0	2.2
クラブ・部活動	30.8	37.7	13.2	18.2
休日の生活	40.2	48.8	8.7	2.3

表5 友達との付き合い

	とても楽しい	まあまあ楽しい	あまり楽しくない	楽しくない
全体	42.3	49.5	6.0	2.2
難関校	60.0	31.4	4.3	4.3
準難関校	44.5	50.9	4.5	0.0
平均校	54.1	39.5	4.5	1.8
準平易校	32.3	58.2	7.3	2.1
平易校	39.8	50.8	6.5	2.9

これらの活動の楽しさが入学難易度と関係があるかどうかを知るために、「友達との付き合い」の楽しさを入学難易度別に見たのが表5である。この結果を見る限り、友達との付き合いなどが学校生活に楽しさを与えているという事情は入学難易度とは関係がないと思われる。

結局、入学難易度の差を越えて、すべての高校生にとって学校生活は全体として確かに楽しいが、その楽しさを支えているのは「友達との関わり」や「クラブ・部活動」の楽しさであって「授業」の楽しさではないということである。

学校生活の大部分を占め、かつ本来の学校の存在根拠でもある授業（学習）という活動において、高校生の大半は楽しさを感じていない。このような状況の中で高校の秩序が崩壊に至らない——崩壊している高校もあるが——のは、一つには「友達との交わり」の楽しさが授業のもたらす苦痛を癒しているためであり、もう一つには、小学校からの教育の成果としての「秩序志向」の価値意識のゆえであろう⁵⁾。

では、授業も含めた「学習」という活動そのものに対して高校生はどう振舞っているのだろうか。学習への「意欲」はどの程度あるのだろうか。言い換えれば、彼らに〈知への欲求〉はあるのだろうか。彼らの関心はもっぱら〈遊び〉〈弛緩〉〈放逸〉の方向にのみ向いているのだろうか。

(2) 「学習意欲」の有無、〈知への欲求〉を検証する前に、そもそも高校生は高校における〈学び〉〈学習〉というものをどう捉えているのかを見ておこう。

①その点に関わって、本研究では、「社会生活の中で必要なさまざまな態度や能力（下記）について、高校の学習がその向上や育成にどの程度効果があると考えるか」を4段階の尺

高校生は学びたがっている

度（大きい効果がある・ある程度効果がある・あまり効果がない・ほとんど効果がない）を用いて尋ねた。

「社会生活の中で必要な態度や能力」として取り上げたのは以下の 11 個である：

- 〔受験〕 大学受験に勝ち抜く知識や技術
- 〔教科〕 それぞれの教科の知識
- 〔我慢〕 辛いことでも我慢して耐える力
- 〔仲間〕 仲間と協力し合う態度
- 〔常識〕 一人前の社会人として持つべき常識
- 〔多面〕 ものごとをいろいろな面から考える力
- 〔自分〕 人に頼らず自分の頭で考える力
- 〔職業〕 社会に出てから働く時に必要な能力
- 〔現実〕 実際の社会の問題を考える力
- 〔意見〕 自分の意見を誰に対しても言える態度
- 〔生活〕 生活の中でぶつかる問題をうまく処理する力

回答結果に因子分析を施すと、4つの因子が抽出された。11 項目の因子負荷量は表 6 の通りである。

抽出された 4 因子の因子負荷量が絶対値で 0.5 以上になる項目に注目し、各因子はそれらの項目が共通に含んでいる能力と考えて、次のように名づけることにする。

〔第 1 因子〕：「職業の中で必要な能力」「多面的に考える力」「社会人として必要な能力」「自分の頭で考える力」などが共通に含んでいる能力⇒〈総合的思考力〉と命名

〔第 2 因子〕：「実際の社会の問題を考える力」「生活上の問題を処理する力」「自分の意見を言える態度」などが共通に含んでいる能力
⇒〈現実処理能力〉と命名

〔第 3 因子〕：「辛いことを我慢する力」「仲間と協力する態度」「自分の意見を言える態度」などが共通に含んでいる能力

表 6 高校生から見た高校教育の効果

	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
職業	0.7604	-0.2543	0.0173	0.1624
多面	0.7527	-0.1875	0.2470	0.0603
常識	0.6999	-0.2632	0.1890	0.0910
自分	0.6502	-0.1766	0.3360	0.0891
現実	0.2857	-0.8274	0.0643	0.1817
生活	0.3027	-0.7738	0.2481	0.0530
意見	0.3017	-0.5321	0.5236	-0.0144
我慢	0.1033	-0.0984	0.8505	0.0910
仲間	0.3287	-0.1705	0.6999	-0.0029
受験	0.0293	-0.1331	0.0334	0.8417
教科	0.2002	-0.0276	0.0462	0.8146

⇒〈協同能力〉と命名

〔第4因子〕：「大学受験を勝ち抜く知識」「教科の知識」

⇒〈教科的能力〉と命名

さて、まずこのように4因子が抽出されたという結果それ自体が、一つの興味ある事実を示している。それは、高校生は、「教科の学習や受験勉強を通して身に付ける能力」と、「ものごとを色々な面から多角的に考える思考力」や「人に頼らないで自分の頭で考える力」あるいは「生活の中でぶつかる問題を処理する力」とを、別の能力として捉えている、ということである。

教科の知識を増やすことが、一般的にものごとを考える力を鍛えるのかどうか、あるいは生活の中で実際に直面するさまざまな問題を処理する力を高めるのかどうか。これは高校教育の意義を考えるうえで非常に重要な問題である。また、この問題について明確な結論が出ているとは思えない。教育関係者の間でも研究者の間でも見解が分かれるところであろう。本当のところどうであるのかはともかく、本調査結果が示しているのは、高校生自身は、自ら学んでいる教科の学習の経験に照らして、両者を別のこととして捉えている、ということである。

②では、高校生は、因子として抽出された4つの能力の形成について、高校教育がどの程度効果を有していると考えているのだろうか。先の11項目の単純集計結果は表7の通りである。

大多数（80％以上）の高校生は、高校教育が〈教科的能力〉の形成に効果がある（「大きい」+「ある程度」）と考えている。とりわけ大学受験に勝ち抜く学力の向上に関しては「大きな効果がある」と考えるものだけでも40％になる。

それに対して、〈協同能力〉および〈総合的思考力〉の形成に高校教育が有効、と考える

表7 高校生が考える高校教育の効果

	大きい 効果がある	ある程度 効果がある	あまり 効果がない	ほとんど 効果がない
A. 大学受験に勝ち抜く知識や技術の向上	39.3	44.4	12.4	3.8
B. それぞれの教科の知識を増やすこと	28.3	56.5	11.5	3.7
C. つらいことでも我慢して耐える力の形成	20.5	39.4	27.2	12.9
D. 仲間と協力しあう態度の育成	19.7	36.1	27.9	16.2
E. 一人前の社会人としてもつべき常識	18.7	44.5	26.8	10.0
F. ものごとをいろいろな面から考える力の育成	18.1	40.2	31.4	10.2
G. 人に頼らず自分の頭で考える力の育成	17.2	43.5	28.6	10.7
H. 社会に出てから働くときに必要な能力の育成	13.0	39.4	35.0	12.7
I. 実際の社会の問題を考える力の育成	11.4	40.5	34.1	13.9
J. 自分の意見を誰に対しても言える態度の育成	9.4	31.9	38.6	20.1
K. 生活の中でぶつかる問題をうまく処理する力の育成	7.6	35.3	37.7	19.3

高校生は学びたがっている

高校生は6割と少なくなる。さらに、〈現実処理能力〉の形成に関して高校教育が有効、と考える高校生は半数以下と少なくなっている。

先に、高校生は「教科の知識を増やすこと」と「一般的にものごとを考える力を鍛えること」「生活の中で実際に直面するさまざまな問題を処理する力を高めること」を別のこととして捉えていると書いたが、高校教育の効果に対する彼らの見方の中にもその捉え方が表れている。

(3) さて、以上の考察を踏まえて、本稿の主題である「学習」に対して高校生はどのくらいの意欲を持っているのかという問題にもどることにしよう。

①まず、学校からの帰宅後の勉強時間について尋ねた結果は次のようになっている。

表8 帰宅後の勉強時間

1. 30分未満	54.6
2. 30分～1時間	22.1
3. 1時間～2時間	13.2
4. 2時間～3時間	5.9
5. 3時間以上	4.1

帰宅後に30分未満しか勉強していないものが過半数である。

②また、学校の勉強を生活の中でどれくらい重視しているかを知るために、学校の勉強に費やす時間と他の活動に費やす時間がどのような配分になっているかを聞いた。その答えは表9の通りである。

「学校の勉強は最低限必要なことしかせず、自分の好きなことに多くの時間を使っている」と答えた者が78.9%と大多数を占めている。

③さらに、端的に「勉強することは好きですか」という質問をしているが、その答えは表10のようになっている。

「嫌い」を選んだものが36%、「どちらかと言えば嫌い」を加えると、「嫌い」と思っているものは80%を越えている。

表9 学校の勉強と他の活動への時間配分

1. 学校の勉強は最低限必要なことしかせず、自分の好きなことに多くの時間を使っている	78.9
2. 学校の勉強にも他のことにも同じくらい時間を使っている	13.9
3. 学校の勉強にかなりの時間を使っているが他のこともある程度はやっている	5.1
4. 他のやりたいことも我慢して学校の勉強にできる限りの時間を使っている	2.0

表10 勉強は好きか

1. 好き	1.5
2. どちらかと言えば好き	15.9
3. どちらかと言えば嫌い	46.8
4. 嫌い	35.8

表11 高校の教育でもっと力を入れるべきもの（複数選択）

A. [将来] 自分の将来の生き方をゆっくりと考えさせること	55.1
B. [興味] 生徒の興味関心に応じた学習	54.1
C. [仲間] 仲間と集団で何かをする楽しさを経験させること	46.4
D. [職業] 学校を出て職業についたときに必要な知識や技術の学習	44.0
E. [多面] ものごとをいろいろな面から考える力の育成	40.8
F. [理解] 分からなかったことが分かるようになる楽しさを経験させること	40.6
G. [意見] 自分の意見を誰に対しても言える力の育成	38.9
H. [自分] 人に頼らず自分の頭で考える力の育成	36.7
I. [生活] 生活の中でぶつかる問題をうまく処理する力の育成	31.5
J. [現実] 実際の社会の問題を考える力の育成	30.7
K. [我慢] つらいことでも我慢して耐える力の育成	28.4
L. [受験] 大学受験の指導	26.2
M. [教科] それぞれの教科の学習	15.9

以上の①②③で示された調査結果から判断する限り、高校生の「学習意欲」は低いと言わざるをえない。「学習意欲の低下」という通説的見解は裏付けられたかのように見えるが、はたしてそうなのか。

④実は、以上の結果だけで「高校生の学習意欲は低い」という結論を下すのは早計である。

本調査では「高校の教育でもっと力を入れるべきだと思うもの」について13項目の中から選んでもらった。その結果は表11のようになっている。

この結果を見る限り、高校生は確かに「教科の学習」や「受験の学習」に対する「意欲」が低い。「大学受験の指導をもっとして欲しい」高校生は26%、「教科の学習にもっと力をいれてほしい」と思っている高校生はわずか16%しかない。

しかし、彼らが強い「意欲」を示す学習もある。先の能力に関する4因子の名称を使えば、〈総合的思考力〉〈現実処理能力〉〈協同能力〉を育成する学習である。さらに「自分の興味関心に応じた学習」をしたいと答えたものは半数を越え、「分からなかったことが分かるようになる楽しさを経験させること」にもっと力をいれてほしいと思っているものは40%を越えている。

高校生は学びたがっている

この傾向は高校の入学難易度によって違うのではないかと推測したくなるのは当然である。だが、表12に示されているように、これは、入学難易度の違いを超えて、調査対象となったすべての高校に共通している傾向なのである。

以上の分析結果から結論を出すならば、高校生は確かに「教科の学習」や「受験のための学習」に対しては「学習意欲」が低い。しかし、「〈総合的思考力〉〈現実処理能力〉〈協同能力〉を育成する学習」や「自分の興味関心に応じた学習」「分からなかったことが分かるようになる楽しさを経験できる学習」に対する「学習意欲」は決して低くない。むしろ高いと言っているのではないかと。少なくとも、高校生の学習意欲について論じる場合、前者の学習意欲の面だけを捉えて「高校生は学習意欲が低い」と結論付けるのは失当であろう。後者の学習意欲の面も含めて、その全体を捉えた上で高校生の「学習意欲」について論じるべきではないだろうか。

高校生の学習意欲について調査する場合、常識的に「勉強が好きか」「勉強時間はどれだけあるか」と質問をすれば「勉強は好きではない」「勉強時間は短い」という答えが返ってくる。その結果を素朴に解釈すると「高校生は学習意欲が低い」ということになる。それは「勉強」という言葉が「教科的能力の向上」「大学受験に有効な知識の蓄積」として高校生に受け止められているからである。高校生自身が「教科の学習」「受験のための学習」といった学習と「総合的思考力や現実処理能力を育成する学習」「自分の興味関心に応じた学習」といった学習を実際には無意識のうちに区別しているにも関わらず、言葉として「勉強」「学習」と言われたときには前者のみを思い浮かべるという習性を身に付けてしまっているのである。

「学習」と言えばまず「教科の知識の獲得」「受験のための知識の蓄積」を思い浮かべ、

表12 高校入学難易度別「高校の教育でもっと力を入れるべきもの」ランキング

全体	難関校	準難関校	平均校	準平易校	平易校
将来55.1	将来59.7	興味50.0	興味61.9	興味57.3	将来53.0
興味54.1	興味59.7	将来47.1	将来61.4	将来54.5	職業46.3
仲間46.4	多面52.2	仲間47.1	仲間42.8	仲間50.0	興味45.3
職業44.0	仲間46.3	意見45.2	理解39.5	職業48.7	仲間44.9
多面40.8	意見46.3	多面43.3	多面39.1	理解45.2	意見39.9
理解40.6	自分46.3	職業39.4	職業38.1	多面41.1	自分39.5
意見38.9	職業37.3	理解37.5	意見37.7	意見35.0	我慢39.2
自分36.7	理解37.3	自分36.5	自分35.8	生活34.7	多面38.2
生活31.5	現実35.8	生活36.5	現実29.3	現実34.4	理解38.2
現実30.7	生活34.3	現実36.5	生活27.4	自分32.8	生活28.7
我慢28.4	我慢28.4	受験30.8	我慢22.8	受験29.3	受験26.0
受験26.2	受験16.4	我慢24.0	受験22.8	我慢23.6	現実24.7
教科15.9	教科11.9	教科20.2	教科17.2	教科13.1	教科17.2

それらの学習への意欲だけで高校生の「学習意欲」を測ってしまうという習性は、実は研究者に一般的に見られる習性でもある。その意味では、本研究の結果は研究者の——のみならず一般の人々の——高校生の学びを問題とするときの視線の反省をも要請しているのではないか。

「高校生は学習意欲が低い」という通説的見解は、「教科的知識」への意欲だけを「学習意欲」とみなす視線——私はこれを〈学校化された視線〉と呼びたい⁶⁾——がもたらしたものであるべきではないだろうか。高校生には〈学び〉への意欲がある。彼らは〈知的欲求〉を持っている。ところが実際の学校の「学習」はそれに応えられていない。そのズレが、〈学校化された視線〉をもった私たちには「学習意欲の低下」と見えてしまう。「学習意欲の低下」と呼ばれている現象を、私たちはそう解釈するべきではないのだろうか。

高校生には「学びへの意欲」がある。にも関わらず「学習」と言えば「教科の知識の増大」と「受験のための学習」だと思い込んできた私たちは、彼らの「学習意欲」を正当に受け止めることをせず、「高校生には学習意欲がない」と嘆いてきた。パンを求めている人間に石を与え、食べようとしないのを見て「せっかく食べ物を与えているのに……」と言っているようなものではないか。

おわりに

最後に、本研究の結果から付随的に導き出されるいくつかの論点に言及しておきたい。

①「勉強時間の短さ」から「受験の圧力は弱まっている」と判断する見解があるが、本調査の結果から推測されるのはむしろ逆のことである。「勉強時間の短さ」は決して受験の圧力が弱まっていることを示しているのではない。そうではなく、教科の学習や受験のための学習に嫌気が差し、うんざりしてやる気がなくなるほどに、学力を基準にした選抜システムという環境は高校生の学習に強力な磁場をかけている、と解釈するべきではないか。「学習意欲の低下」という現象から、私たちは、選抜システムとしての学校の選抜機能が衰えたことではなく、逆に、学校の選抜機能が極限にまで到達してしまったことを読み取るべきではないか。

②「教科の学習」への意欲が低いことはもちろん問題とされるべきである。しかし、問題にしたからといって「だから、宿題などを出してもっと勉強時間を増やさせるべきだ」という結論になるわけではない。

表13は「あなたが勉強する理由として当てはまるものは？」という問いへの答えである。

表13 勉強する理由

1. いい進学や就職をしたい	48.1
2. 勉強しないと成績が下がる	39.8
3. 成績をもっと良くしたい	31.5
4. 知らなかったことを覚えることや分かっていくことが楽しい	28.3
5. 将来社会に出てから役に立つ	23.2

表13が示すように、高校生の「教科の知識」や「受験のための知識」に関する学習意欲は何よりも教育システム内的な〈報酬〉（良い進学をする、成績を上げる、成績を下げない）や教育システム外的な〈報酬〉（良い就職をする）によって引き出されている。「知らなかったことを知り、分からなかったことが分かる楽しさ」という、〈知〉や〈学習〉という活動それ自体がもたらす喜び、あるいは、「将来社会に出てから役に立つ」という、その学習で身に付けた能力を発揮することによる言わば〈自己実現的な充足感〉は、高校生が勉強する理由としては弱い力でしかない。その意味では、「宿題を増やす」「入学難易度の高い大学受験を目標にさせる」などさまざまな形で教育システム内的外的な〈報酬〉を提示することは「学習意欲」を増大させる効果があるかもしれない。

しかし、別の観点から見れば、1970年代までのように「報酬」や「制裁」の力では高校生の学習意欲を喚起することができなくなってきたからこそ、今の「低い学習意欲」という現実がもたらされたのではないか。だとするならば、教科の学習についても、いま必要なのは「報酬」や「制裁」ではなく、「分からなかったことが分かるようになって楽しい」とか「将来の生活に役に立つと感じられる」といった学びに対する〈内発的な動機〉を高校生に与えることではないか。そのような内発的な動機を持ちながら学びを経験することこそが高校生に必要なものなのではないか。〈報酬〉〈制裁〉をチラつかせることによる学習の強制は「授業の楽しさ」や「学ぶ喜び」を一層縮減させるだろう。そしてそれは教科的な知に対する〈知的な好奇心〉に基づいた本来の意味での〈学習意欲〉を低下させる方向で作用をすることになると思われる。

結局、高校教育の「学習」をめぐる最大の課題は、学習を「分かる楽しさ」や「将来発揮すべき能力の獲得」などが感じられるようなものへ変換していくことである。本研究の結果はそういうことを示唆しているのではないか。

注

- 1) 「科学は社会にとって有用と思う」「科学についての知識を得ることは楽しい」「30歳になったときに科学関連の職についていることを期待している」などの項目について、日本はOECDの平均値を下回っている。『内外教育』2007年12月11日付より。
- 2) 『NHK 中学生・高校生の生活と意識調査 楽しい今と不確かな未来』NHK放送文化研究所編、NHK出版、2003
- 3) 『内外教育』前掲紙より。
- 4) 本稿の元になった調査は2001年に実施されたが、調査の設計はここに記したような問題意識に基づいてなされた。
- 5) 高校生の秩序志向については本アンケートの別の質問に対する回答結果からも読み取れた。
- 6) 〈学校化された視線〉という造語はイリイチのdeschooling societyをヒントにしている。因みにdeschooling societyは邦訳者によって「脱学校社会」と訳され、この言葉が流布しているが、この訳語ではsocietyがdeschoolの目的語になっていることが分かりにくい。「社会を非学校化する」「社会の非学校化」などと訳すべきではないかと思う。「学校化された社会(schooled society)」を「非学校化すること」がdeschoolなのである。